

「英語学概論」の歩み* —先達からの継承—

山 本 史歩子

1. はじめに

現在、日本における英語は外国語として位置づけられており、初等・中等教育では実践面に重点を置いたカリキュラムが推奨され、実践されている。しかしながら、大学などの高等教育機関では、「実践」と「文芸」をバランスよく習得することが期待されており、¹その「文芸」を担っている科目の1つが「英語学概論」である。大学生は、大学で初めて外国語としての英語から学問・研究の対象としての英語に触れることになる。それまでのコミュニケーションや文法中心の学びから理論的学び、「英語学」へとシフトしていくのである。

一般的に「英語学概論」の授業は、「音声学」、「音韻論」、「形態論」、「統語論」、「意味論」、「語用論」の6つの専門領域を軸に、「英語史」・「文体論」や「社会言語学」・「英語教育」・「言語習得」といった応用言語学など広範囲に渡り様々な専門領域を扱う。

田島（2001: 49）によれば、日本最初の本格的な英語学総説に相当する書は、大正時代に遡ることができ、1923年に裳華房から出版された、八木又三の『新英文法』とされている。²内容は、「音声学」、「文法」、

「英語史」などを中心に構成されており、当時としては初めて包括的に英語学を学べる書として日本における英語学研究、英語教育に大いに貢献したと推察される。

本稿では、青山学院大学文学部英米文学科の「英語学概論」の歩みを回顧することで、青山学院大学の英語教育の基礎を築き上げた先達から70年という月日を経て、今何を継承すべきか、という問いについてじっくり考察したいと思う。³具体的には、現存する各時代の講義内容をもとに、どのような講義・授業が行われていたか検証しながら、その軌跡を辿っていくことにする。

2. 日本における英語学研究の流れ

本節では、戦前から戦後にかけて日本の英語学研究を牽引してきた先達の研究書をもとに、英語学研究の流れを概観する。⁴

大塚高信（1949: 278-280）は、1949年に出版した『英語學論考』の中で、日本における英語学の歴史は、1912年を境に2つの時期に分けることが可能であると述べている。第1期は斎藤秀三郎が活躍した明治時代であり、第2期は、大正時代から昭和にかけて活躍をした市河三喜を中心とした時代である。⁵更に、大塚高信（1949: 292-293）は、市河三喜の『英文法研究』（1954 [1912]）をもって日本の英語学研究の新時代の幕開けとし、「文法を規則の集團と考へ、その規則に外れたものを誤と考えた傳統文法、例外的事象を説明するに独斷を以てした嫌ひのある前期の文法は、これによって初めて眞の科學的研究となったのである」と提唱している。

市河三喜を始めとして、多くの優れた英語学研究者が日本の英語学研究の発展に貢献してきたが、その全てを紹介することは紙面の都合上不可能である。ここでは、近代日本の英語学の基礎を築いた市川三喜、宮部菊男、安井稔の3名を取り上げる（注2参照）。

市川三喜は、1936年に出版された『英語学』の序文で次のように語

っている。

この本は「英語学」への序説とか入門とかいうようなものである。英語でいえば Introduction である。Introduction といえは語源的には「導入」の意味であるけれども、ここでは英語学の花園へ読者を案内して、この草あの花について自分が親しく観察研究したことを一々説明する代わりに、ここに集まった多くの故人先輩についてその主なる業績を批評しながら紹介していくという方法を取った。広い地域をなるべく全部概観の出来るように駆け廻った積りであるが、それでも地名・人名の研究だとか各地の方言の研究だとか、まったく素通りかあるいはのぞいても見ない分野が多く残っているだろう。しかしそうして多くの名士に紹介しておけば、後はゆっくりその人々を訪問して親しく名論卓説を聴いて啓発されるなり、またはさらにその人達から自分の興味を感じた方向に紹介状を貰って、無名・有名色々な学者について研究の刺戟を受けることができよう。本書はそう言う意味における Introduction である。

この著書は、10章から構成され「辞書と語彙の研究」、「方言の研究」、「音声学」、「音韻論」、「英語史」、「文法」、「特殊研究」、⁶「意味論と文法論」、「文法論」、「文献の文献」となっている。現代の「英語学概論」以上の領域を扱っている点において、当時の日本の英語学の新時代の息吹を感じざるを得ない。この序文から、概論のような授業では、いかに学生が自ら問題を提起しその答えを求めて探求するよう指導することが重要であるか、がうかがえる。

宮部菊男は、1961年に研究社から出版された『英語学 テーマと研究—V—』で英語学研究について次のように述べている。⁷

英語学の名のもとに行われる研究を対象によって分けると、(抑揚もふくめての) 音声学・音韻論、(語形成と統語論をふくめての) 文法、(辞書学をふくめての) 語彙論・語形成論、その外に意味を対象とする意味論ということになる。(p. 6)

上記の各論に加えて、「文体論」も英語学の研究対象とし、英語学を英語文献学とも捉え、言語の歴史や文化までその研究対象は及ぶとしている (pp. 6-7)。実際に目次には、「音声学」・「音韻論」・「正字法」・「記述文法」・「歴史文法」・「英語史」・「OE・ME の文法」・「特殊研究」⁸・「意味論」・「語彙論」・「語源研究」・「文体論」まで、広範囲をカバーしている。

安井 (1987: iii) は、『英語学概論』の冒頭で、次のように述べている。

英語学概論というのは、英語という言葉が、いったいどんな言語であるかを概観する学問領域である。概観であるからには、英語という言葉のもっているすべての、少なくとも、できるだけ多くの相を、対象として含むものでなければならない。対象が網羅的になると、その記述様式は、広く浅く、ということになってくる、が、そこに、いわば、英語学概論の落とし穴がある。まず、「広く浅く」というのは、初歩的であることを必ずしも意味するものではない。確かに、「概論」というのは、教育課程からすると、大学の1、2年向け、いわば、初心者向けのものである。が、その内容は、決して、初歩的 (elementary) であるのではない。もっと言うなら、「基本的」(fundamental) なものである。欲をいえば、そういう基本的な叙述様式の行間から、より深い研究成果の姿が垣間見えるものであってほしい。

この著書は、「英語の現況」、「英語の系譜関係」、「時代区分と各時期

の特色」、「つづり字」、「音声」、「語彙」、「語源」、「統語論」、「意味論」、「情報構造」、「語用論」、「アメリカ英語」の12の章立てとなっている。市河三喜の『英語学』から、半世紀経っており、この間に新たな研究分野として発達した「語用論」や「情報構造」などが取り上げられている。

3. 青山学院大学文学部英米文学科における「英語学概論」の歩み

青山学院大学文学部英米文学科は、2019年4月創設70年を迎えた。青山学院大学が現在の文部科学省から新制大学として認可されたのは、1949年である。⁹つまり、英米文学科は創立当時から設置されており、他に商学部（1953年に現在の経済学部へ統合）、工学部（1950年に関東学院大学に合併）が設置されていた。¹⁰

青山学院大学文学部英米文学科は、開設以来、高い水準の英語教育を学生たちに教授してきた。1949年の授業要覧には、教員（教授、助教授、非常勤講師を含む）18名体制のもと「英語学」から「英文学」、「米文学」、「英語聖書」、「日本文学」にいたるまで37の科目が開講され、当時の私立大学としては、これだけ多岐にわたり一流の研究者が集まり、講義を行ってきたことは異例ともいえる。¹¹田辺（2018: 111）によると、1877年に創立された日本最古の大学である東京大学文学部英文科では、1947年、近代英語学研究を牽引した市河三喜の後任として中島文雄が着任し、「英語学概論」、「近代英語の成立」、「英語学演習」を講義、1950年に着任した佐々木達夫が「英詩の英語」を講義し、2名体制で英語学の授業を行ったとある。一方、ほぼ同時期に（1949年から1950年）、英米文学科では、森下捨己が「英語学」・「英語表現方法」、尾崎茂が「商業英語」、藤原喜多二が「英語史」・「英語音声学」・「チャーター時代」を担当しており、英語学だけでも3名体制であったことは感慨深い。

無論、英語学だけではなく創立当初（1949年）、イギリス文学は初

代学長でもある豊田實をはじめとして、佐藤清、倉長眞、島居哲が、アメリカ文学は松原岩雄が、それぞれ専任教員としてあたり、5名体制で19の科目を担当していたことは、いかに青山学院大学文学部英米文学科が戦後の日本の英語教育の発展に惜しめない労力・時間を注いできたか、を証明しているといえる。¹² 当時の教員の質と充実した講義は、現代まで引き継がれていることを鑑みると、英米文学科が主となり「英語の青山」という不動の地位を築き上げたことは驚くに値しない。

3.1 1949（昭和24年）から1981年（昭和56年）

1949年創立当時から1951年まで講義内容は作成されていないが、設置科目と担当教員が記された資料は現存している。当時の資料によると、1950年から「英語学」が開講され森下捨己が担当した。

1952年、「英語学」は前年に引き続き森下捨己が担当し、講義内容には、「言語学事実論方法論、構造論並びに変遷論の一部を英語の観点から一通り検討すること」にしている。講義は全部英語でしているが、専門語は日本語でも與えている。講義は二ヶ年で大体完うするが前一年か後一年のいずれかをとればよい。殆ど毎時間十分間試験を実施し、原則として試験は行わない」と記述されている。当時、「英語学概論」ではなく、「英語学」の名称で2年次に配置され、現在の「英語学概論」に相当する授業が英語で行われており、かなり高水準の講義が行われていたと推察される。

1955年から勇康雄が「英語学」を担当した。当時の講義内容には「英語の科学的研究方法を教える。phonemics, morphemics の考え方を解説し、それらの英語に於ける適用を講義と練習によって訓練する。詳論はプリントにして、学生はそれに依って予備知識を養い、教室に於いては重点的説明と、exercise 及び recitation に依る学生自身の発言、討論を奨励する。本講義は言語学としての英語研究の学問的基礎を訓練、

養成するものである」とし、学生たちの積極的な参加を重要視している。

1958年から、勇康雄の「英語学」（3年次に配置）に加えて、新に「言語学概論」という科目が設置され、同年に着任した牧野勤が担当をした。当時の授業内容には「構造言語学の原理と方法の紹介・音韻論と形態論の分析方法の概説に依って言語分析の手段を与えることを主目的とする。（言語とは何か、科学としての言語学、言語学史、音声学、音素論、形態論、言語の意味、言語と文化、歴史言語学、応用言語学等.）」とあり、構造言語学を基礎とする科学的なアプローチを紹介しながら、基礎的な領域だけでなく応用言語学にまで網羅し、かなり濃い講義が行われていたと推察される。使用したテキストは、B. Bloch and G. Trager の *Outline of Linguistic Analysis* (1942) であった。「言語学概論」は、2年次に配置され、1960年まで開講された。

1963年、勇康雄がアメリカ留学中のため「英語学」は宮部菊男、大束百合子の両名が担当をした。¹³ 宮部菊男の講義内容は、「英語学の内容を概観するとともに、OE, MEの初歩的な概念を与えるようにしたいと思う」と記されており、Simeon Potter の *Our Language* (1950) をテキストに採用した。宮部菊男は、文献学者 (philologist) であるから、古英語・中英語の知識を通して、現代英語の理解を深めようとしていたと思われる。

1964年から1961年に着任した大沢茂が「英語学」を担当するようになるが、この年は教育学科の「英語学」であり、英米文学科の「英語学」は翌1965年から担当するようになる。講義内容には「前期は現代英文法概論、後期は構造言語学概論についてのべ、これらを対比して英語学概論研究としたい」とあり、科学的な理論に重点を置いた授業であったと推察される。

1967年から1962年に着任した毛利秀高が「英語学」を担当、講義内容には「科学としての言語学を英語を通じて学習する。まず「言語

学とは何か」という問題を取り扱い、次にその言語学の取扱う範囲を知る。その後、簡単な言語史を説明し、次に英語学の各論（音韻論、形態論、統語論）を学ぶ、又、言語は時の経過と共に変化するので、通時論の立場からも英語を取扱いたい」と記され、通時的な視点で英語の構造を解説しようとしていたことから、文献学者（philologist）である毛利秀高らしい講義が行われていたと推察される。

1968年から1965年に着任した谷美奈子が「英語学」を担当した。講義内容には「「ことば」とは何かという基本的なことについてまづ考え、ついで英語学一般即ち英語という「ことば」を科学的に研究するための基礎的な事柄について学ぶ。言語プロパーの問題について考えるばかりでなく、言語とその周辺の問題についても、どのような研究分野があり、どのような研究方法があるかを学ぶ」とあり、当時、変形文法を専門とした谷美奈子は、隣接する領域（恐らく、言語獲得）までを対象とした講義を行っていたと思われる。「英語学概論」も1950年代 Noam Chomsky の台頭によって変革の時を迎えるのである。1968年には、大沢茂、牧野勤、毛利秀高、谷美奈子、江本進による5コマの「英語学」が配置されていた。

1969年、従来の「英語学」に加えて新たに「英語学概論」が設置された。当時「英語学概論」の担当教員は、宮部菊男、寺沢芳雄、広瀬三男の3名で2年次に配置され、「英語学」は大沢茂、牧野勤、毛利秀高、谷美奈子の4名が担当し、3年次に配置されていた。この年をもって「英語学」は姿を消すことになる。¹⁴

「英語学概論」の講義内容を見ると、3名とも共通して、英語学とは何かを問い、隣接する諸科学・諸研究との関係を考慮しつつ、英語学の理論研究及び文献学の考察との関連から現代英語の特色・正しい認識を教授するといったことに目標を置いている。また、「英語学」の講義内容でも、英語学の核となる専門領域と周辺の研究分野を共時的観点からは、科学的研究をベースに、通時観点からは、英語の発達の

研究を軸として、双方向から英語の理解を深めることを目的とすると、いずれの講義内容にも記述されている。1969年、「英語学」と「英語学概論」が7コマ配置され、1968年から1969年が英米文学科史上最も多くの授業が提供されていた。

1972年から1970年に着任した秋元実治が「英語学概論」を担当する。当時の講義内容には「共時的な立場から英語学の分野を広く見ていく。殊に伝統文法—構造言語学—変形文法の流れをまず概略し、同時に最近目覚ましい発展をとげている言語理論のいくつかにも言及する予定である。その他のトピックスとしては American English、方言、文体論・意味論などが考えられるが、プリントなどで補って出来るだけ広くカバーする積りである」とあり、J.H. Herndon の *A Survey of Modern Grammars* (1970) をテキストに使用していた。英語学研究の歴史・文体論・方言まで扱い、宮部菊男の流れを継承する「英語学概論」の授業が行われていたといえる。

1976年に着任した宮部菊男が同年、再び「英語学概論」を担当する。当時の講義内容には「英語学研究の諸分野を解説し、基本的な事項を説明しながら、研究への導入を行いたい。今回は英文法を中心とし、その周辺の諸問題との関係から始めたいと思う」と記述されている。東京大学の教員であった宮部菊男は、1963年、米国留学中であった勇康雄に代わり青山学院大学で「英語学」を担当して以来、1969年「英語学概論」、1970年「英語史」を担当した経緯があり、青山学院大学との間の浅からぬ縁により青山学院大学に迎えることができたのであらうと推察される。

1982年、大学は大きな変革を迎える。即ち、厚木キャンパス開学である。1950年以来、33年に渡り「英語学」・「英語学概論」は開講され、1968年には5コマ、1969年には7コマ同時開講された。当時の気鋭の研究者たちから一流の基礎学を学ぶ機会に恵まれたことは、学生たちにとってその後の専門領域の研究の土台となり、何事にも代えがた

い学びが実現されていたといえる。先達が残した基礎学は新たなキャンパスで継承されていくのである。

3.2 1982 年（昭和 57 年）から 2002 年（平成 14 年）

1982 年、新たに厚木キャンパスが開学された。新キャンパスには、学部 1、2 年生の教育が行われ、基礎学である「英語学概論」は、厚木キャンパスで開講されることになる。この年の「英語学概論」は、秋元実治、松波有、広瀬三男の 3 名が担当した。翌 1983 年に、吉波弘が着任し、同年「英語学概論」を担当した。当時の講義案内には「新しい言語理論における英語の諸相。過去 20 数年間、北アメリカを初めとして、世界的に研究・開発されて来た、生成文法理論に基づいて、英語の音声、音韻、形態、統語、意味、方言、史的变化、及び実践的問題を学ぶ」と記されている。吉波弘は生成音韻論の研究者であり、谷美奈子とともに、生成文法理論が英米文学科で花開いていくことになる。

1984 年、新たに中澤和夫が着任、同年「英語学概論」を担当した。1985 年の講義内容には「最近の生成文法の発展をもとにした英語学の分野で、どのようなことが研究・興味の対象となっているかを概観する」とあり、中澤和夫は谷美奈子、吉波弘とともに、その後、生成文法を基盤とした「英語学概論」の歴史を作っていくことになる。一方で、同年松波有と山崎真稔も「英語学概論」を担当しており、バランスのとれた「英語学概論」の講義が行われていたといえる。

1985 年、松波有が着任する。講義内容には「現代英語概説。現代英語について、発音・綴り字・句読法の変化の傾向、文法的特徴、使用域の問題等を順次取り上げ概説する」とあり、松波有は文献学者（philologist）であるので、発音・綴り字などの変化の傾向については、深い知識を得られる貴重な講義であったと推察される。

2000 年、1988 年に着任した Donald L. Smith が「英語学概論」を担

当する。講義内容は、“This lecture class will be a general introduction to linguistics. Lectures will be on aspects of syntax, semantics, and phonology. There will be assigned readings, and exercises to be completed. [...]”とあり、英米文学科で最初の英語母語話者による「英語学概論」が開講される。講義内容から、講義形式と学生たちの主体的な参加が融合した開講当時の授業スタイルであったと推察される。

2002年、同年に着任した外池滋生が新たに「英語学概論」を担当する。講義内容には、「人間の言語と動物の「言語」、語の構造を扱う形態論、文の構造を扱う統語論、語や文の意味を扱う意味論、言語の音声を扱う音声学、言語の中の音声の構造を扱う音韻論、言語と社会の関係、言語の歴史的変化、言語の生物学的側面など、英語学（言語学）の様々な領域が、何に関心を持って、どのような研究を行っているのかを、概観し、偏りのない言語観の基礎を作り、その上で統語論の研究への展望が開けるような授業にしたいと思います（後略）」とあり、英語学（言語学）の核となる領域を全てカバーしつつ、最終的に生成文法理論の研究に発展する講義が展開されていたと推察される。

厚木キャンパス開学以来、2003年に相模原キャンパスに移転するまで、1983年及び1987年を除けば、3コマの「英語学概論」が開講されていた。文献学者から生成文法理論の研究者たちが担当し、幅広い基礎学が常に提供されていたことは注目に値する。¹⁵

3.3 2003年（平成15年）から2012年（平成24年）

2003年、1、2年生の教育の場であった厚木キャンパスが閉じられ、相模原キャンパスが開学する。この年から、「英語学概論」は3コマから2コマになる。

2008年から、講義内容の形式が刷新され30回の授業計画の作成が必須となる。これにより、当時どのような授業が毎回行われていたか、より詳細に知ることができるようになる。この年の秋元実治の講義案内

を見ると、コーパス言語学研究が加わり、データの取集方法と分析方法などを学ぶ機会が提供された。同年、中澤和夫の授業計画を見ると、X-bar theory, Transformations, Constraints, Some Universals in Syntax などの用語が多く見られ、生成文法理論に主眼を置いた授業であったことが推察される。秋元実治と中澤和夫の2名体制は、2005年から2009年まで続いた。

2010年から2014年まで、「英語学概論」は、中澤和夫と外池滋生の2名体制となる。両者ともに生成文法理論の研究者であるが、この年の講義案内と授業計画を見ると、3、4年次にどの専門領域を選択しても基礎となる知識が習得できるような講義になっていたといえる。恐らく、秋元実治の退職に伴い、外池滋生は、人間と動物のことば・言語変化・文字の発達・世界の言語などを新たに授業で取り上げ、中澤和夫は、言語形式を重視した授業を行い、偏りのない「英語学概論」が継承されていたと推察される。教科書についていえば、中澤和夫はJean Aitchisonの *Linguistics* (2003) と青山学院大学文学部英米文学科が作成した *A Guide to English Language Studies* (2006) の2冊を指定していたが、2010年以降は、*Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology* (2010) を使用している。

外池滋生の2012年の講義概要には「教科書にそって音声学、形態論、統語論、意味論、などの言語学の領域を日本語と英語を題材として概観します」と記述されており、英語のみならず日本語の構造も研究対象とする興味深い講義が学生たちに教授されていたと思われる。

3.4 2013年（平成25年）から2019年（令和元年）

時代は巡り、再び文学部、教育人間科学部、法学部、経済学部、経営学部、国際政治経済学部、総合文化政策学部は、青山キャンパスに再配置され、1年から4年まで4年間の一貫教育体制となる。

2015年、高橋将一が着任、同年「英語学概論」を担当する。講義概

要は「本講義では、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論といった言語学の研究分野における研究目的、研究方法、基本的な概念などについて概観します。また、受講者の興味、関心を考慮しながら具体的なトピックを選び、可能な限り検討していきます」とあり、授業計画においても英語学の核となる領域を全て学べるように計画されている。加えて、研究方法についても学べるように配慮され、学生たちにとって専門研究の指針となるように構成されている。

2017年から2019年まで、2006年に着任した Elin. S. McCready と中澤和夫が「英語学概論」を担当する。2017年の Elin. S. McCready の講義概要には、“This course is an introduction to some part of modern linguistics. Students will learn the basis of phonology, morphology, syntax, semantics and pragmatics, and some techniques for their formal analysis.” とあり、英語学の理論をベースに、核となる専門領域をバランスよく学べるよう構成されている。

4. おわりに

1949年の創立当初から、講義案内をもとにどのような「英語学概論」の講義が行われてきたのか、概観してきた。どの時代も、担当教員は自らの専門を生かしつつ、基礎英語学に関する深い知識を余すことなく学生たち教授してきた。更には、応用言語学、文体論、コーパス言語学など幅広い領域を網羅し、学生たちがどの専門領域の研究でも進むことができるよう教え、導いてきたといえる。加えて、文献学者たちが担当してきた歴史は特筆に値する。

70年を回顧して、先達から継承すべきことは、「英語学、換言すれば基礎学を学ぶ意義を学生に明示すること」、「英語学概論はいかなる専門領域の研究へと導く入口でなければならないこと」、「その入り口の質的保証のために、担当教員はあらゆる領域に精通していなければならない。英語学概論の核となる専門領域を押さえつつ、最新の言語

理論や研究（共時的・通時的アプローチの両側面を含む）に関する知識も教授すること」を、常に心に留めて、授業を行うことではないだろうか。これらのことは、当然のことと思われるかもしれないが、昨今の研究の流れは、研究分野と研究対象が細分化され、研究者は自分の専門領域における言語現象を深く探求するスタイルが主流となっている。しかしながら、「英語学概論」のような基礎学を担当する教員は、専門以外の領域についても深く探求することが不可欠であり、そのスタンスこそが真に先達から継承すべきことだと信じている。

最後に、学問領域を問わず研究に携わるものの心に響く豊田實のことばで筆をおきたいと思う。

學究の生活はなほ登山のやうなものである。せめて十年に一度位は、見晴らしのきく多少高い山に登ってみたい。（中略）蓋し私が今頂上に立ってゐると思ふ山は、或いは蟻の塔かもしれぬ。長い文化の歴史から見れば、寧ろそれ以下であらう。然しともかく、私は今學究生活途上の一つの峰に立ってゐる。さうしてそこには、汗を乾かす自然の涼風がさよさよと吹いている。（1939: 8）

Appendix A: 青山学院大学文学部英米文学科「英語学概論」担当教員一
覧（着任順）

開講年	開講科目	担当教員
1949 年（昭和 24 年）	英語学（配置なし）	
1950 年（昭和 25 年）	英語学	森下捨己
1951 年（昭和 26 年）	英語学	森下捨己
1952 年（昭和 27 年）	英語学	森下捨己
1953 年（昭和 28 年）	英語学	森下捨己
1954 年（昭和 29 年）	英語学	森下捨己
1955 年（昭和 30 年）	英語学	勇康雄
1956 年（昭和 31 年）	英語学	勇康雄
1957 年（昭和 32 年）	英語学	勇康雄
1958 年（昭和 33 年）	英語学	勇康雄
	言語学概論	牧野勤
1959 年（昭和 34 年）	英語学	勇康雄
	言語学概論	牧野勤
1960 年（昭和 35 年）	英語学	勇康雄
	言語学概論	牧野勤
1961 年（昭和 36 年）	英語学	勇康雄
1962 年（昭和 37 年）	英語学	勇康雄
1963 年（昭和 38 年）	英語学	宮部菊男
	英語学	大東百合子
1964 年（昭和 39 年）	英語学	勇康雄
	英語学	牧野勤
	英語学	大東百合子
	英語学（教育学科）	大沢茂
1965 年（昭和 40 年）	英語学	勇康雄
	英語学	大沢茂
	英語学	牧野勤
	英語学	大東百合子
1966 年（昭和 41 年）	英語学	勇康雄
	英語学	大沢茂

	英語学	大東百合子
1967 年（昭和 42 年）	英語学	大沢茂
	英語学	毛利秀高
	英語学	江本進
	英語学	大東百合子
1968 年（昭和 43 年）	英語学	大沢茂
	英語学	牧野勤
	英語学	毛利秀高
	英語学	谷美奈子
	英語学	江本進
1969 年（昭和 44 年）	英語学概論	宮部菊男
	英語学概論	寺沢芳雄
	英語学概論	広瀬三男
	英語学	大沢茂
	英語学	牧野勤
	英語学	毛利秀高
	英語学	谷美奈子
1970 年（昭和 45 年）	英語学概論	大沢茂
	英語学概論	牧野勤
	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	広瀬三男
1971 年（昭和 46 年）	英語学概論	大沢茂
	英語学概論	寺沢芳雄
	英語学概論	広瀬三男
1972 年（昭和 47 年）	英語学概論	大沢茂
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	広瀬三男
1973 年（昭和 48 年）	英語学概論	大沢茂
	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	広瀬三男
1974 年（昭和 49 年）	英語学概論	大沢茂

	英語学概論	牧野勤
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	広瀬三男
1975 年（昭和 50 年）	英語学概論	大沢茂
	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	広瀬三男
1976 年（昭和 51 年）	英語学概論	大沢茂
	英語学概論	宮部菊男
	英語学概論	広瀬三男
1977 年（昭和 52 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	宮部菊男
	英語学概論	広瀬三男
1978 年（昭和 53 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	宮部菊男
	英語学概論	広瀬三男
1979 年（昭和 54 年）	英語学概論	毛利秀高
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	広瀬三男
1980 年（昭和 55 年）	英語学概論	毛利秀高
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	広瀬三男
1981 年（昭和 56 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	宮部菊男
	英語学概論	広瀬三男
1982 年（昭和 57 年）	厚木キャンパス開学	
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	松波有
	英語学概論	広瀬三男
1983 年（昭和 58 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
1984 年（昭和 59 年）	英語学概論	吉波弘

	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	山崎真稔
1985 年（昭和 60 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	松波有
	英語学概論	山崎真稔
1986 年（昭和 61 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
	英語学概論	中澤和夫
1987 年（昭和 62 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	中澤和夫
1988 年（昭和 63 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
	英語学概論	中澤和夫
1989 年（平成元年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	松波有
1990 年（平成 2 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	中澤和夫
1991 年（平成 3 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
1992 年（平成 4 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
1993 年（平成 5 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
1994 年（平成 6 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
1995 年（平成 7 年）	英語学概論	谷美奈子

	英語学概論	吉波弘
	英語学概論	中澤和夫
1996 年（平成 8 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
1997 年（平成 9 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
1998 年（平成 10 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
	英語学概論	中澤和夫
1999 年（平成 11 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
2000 年（平成 12 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	吉波弘
	英語学概論	Donald L. Smith
2001 年（平成 13 年）	英語学概論	谷美奈子
	英語学概論	吉波弘
	英語学概論	Donald L. Smith
2002 年（平成 14 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	Donald L. Smith
	英語学概論	外池滋生
2003 年（平成 15 年）	相模原キャンパス開学	
	英語学概論	Donald L. Smith
	英語学概論	外池滋生
2004 年（平成 16 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	吉波弘
2005 年（平成 17 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	中澤和夫
2006 年（平成 18 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	中澤和夫

2007 年（平成 19 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	中澤和夫
2008 年（平成 20 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	中澤和夫
2009 年（平成 21 年）	英語学概論	秋元実治
	英語学概論	中澤和夫
2010 年（平成 22 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	外池滋生
2011 年（平成 23 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	外池滋生
2012 年（平成 24 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	外池滋生
2013 年（平成 25 年）	青山キャンパスに統合	
	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	外池滋生
2014 年（平成 26 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	外池滋生
2015 年（平成 27 年）	英語学概論	高橋将一
	英語学概論	西前明
2016 年（平成 28 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	高橋将一
2017 年（平成 29 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	E.S. McCready Jr.
2018 年（平成 30 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	Elin S. McCready
2019 年（平成 31 年）	英語学概論	中澤和夫
	英語学概論	Elin S. McCready

Appendix B: 担当者及び使用教科書一覧

(出版年及び版が不明につき割愛)

使用年	担当教員	教科書
1956 年	勇康雄	『英語学（上下）』 勇康雄著
1957 年	勇康雄	『英語学概論』 勇康雄著
1958 年	勇康雄	『英語学研究』 勇康雄著
1958 年	牧野勤	<i>Outline of Linguistic Analysis</i> , B. Bloch and G. Trager
1959 年	勇康雄	『英語学原論』 勇康雄著
1959 年	牧野勤	<i>Outline of Linguistic Analysis</i> , B. Bloch and G. Trager
1960 年	勇康雄	『英語学』 勇康雄著
1961 年	勇康雄	『現代英語学』 勇康雄著
1962 年	勇康雄	『現代英語学』 勇康雄著
1963 年	宮部菊男	<i>Our Language</i> , S. Potter
1963 年	大東百合子	<i>Outline of Linguistic Analysis</i> , B. Bloch and G. Trager
1964 年	勇康雄	『生活の英語』 勇康雄著
1965 年	勇康雄	『生活の英語』 勇康雄著
1966 年	勇康雄	『生活の英語』 勇康雄著
1966 年	大東百合子	<i>Linguistic and Your Language</i> , R. A. Hall, Jr.
1967 年	大東百合子	<i>Modern Linguistics</i> , S. Potter
1969 年	大沢茂	<i>Essentials of English Grammar</i> , O. Jespersen
1969 年	寺澤芳雄	<i>The English Language</i> , C L. Wrenn
1970 年	広瀬三男	<i>Readings in English Linguistics</i> 小西（編）
1971 年	大沢茂	<i>Applied Linguistics</i> , S. L. Stryker
1971 年	広瀬三男	<i>The English Language</i> , C L. Wrenn
1972 年	大沢茂	<i>Applied Linguistics</i> , S. L. Stryker
1972 年	秋元実治	<i>A Survey of Modern Grammars</i> , J. H. Herndon
1972 年	広瀬三男	<i>The Making of English</i> , H. Bradley
1973 年	大沢茂	<i>Applied Linguistics</i> , S. L. Stryker
1973 年	谷美奈子	<i>Linguistics</i> , D. Crystal
1973 年	秋元実治	<i>Aspects of Language</i> , D. Bolinger

1973 年	広瀬三男	<i>The English Language</i> , L. P. Smith
1974 年	大沢茂	<i>Applied Linguistics</i> , S. L. Stryker
1974 年	牧野勤	<i>Grammar</i> , F. Palmer
1974 年	秋元実治	『現代の言語学』ライオンズ(編)
1974 年	広瀬三男	<i>The Making of English</i> , H. Bradley
1975 年	大沢茂	<i>Applied Linguistics</i> , S. L. Stryker
1975 年	広瀬三男	<i>The Making of English</i> , H. Bradley
1976 年	大沢茂	<i>Applied Linguistics</i> , S. L. Stryker
1976 年	広瀬三男	<i>The Making of English</i> , H. Bradley
1977 年	広瀬三男	<i>The Story of English</i> , H. Alexander
1978 年	秋元実治	<i>The English Language</i> , W. F. Bolton
1978 年	広瀬三男	<i>The Story of English</i> , H. Alexander
1979 年	秋元実治	<i>English</i> , T. Pyles and J. Algeo
1979 年	広瀬三男	<i>The Story of English</i> , H. Alexander
1980 年	秋元実治	<i>General Linguistics</i> , R. H. Robins
1980 年	広瀬三男	<i>The Story of English</i> , H. Alexander
1981 年	広瀬三男	<i>The Story of English</i> , H. Alexander
1982 年	秋元実治	<i>An Introduction to Language</i> , V. Fromkin and R. Rodman
	広瀬三男	<i>The Story of English</i> , H. Alexander
1983 年	秋元実治	<i>Language & Linguistics</i> , J. Lyons
1984 年	中澤和夫	<i>An Introduction to Language and Communication</i> , Akmajian et al.
1984 年	山崎真念	<i>Language & Linguistics</i> , J. Lyons
1985 年	山崎真念	<i>Language & Linguistics</i> , J. Lyons
1986 年	秋元実治	<i>Linguistics</i> , D. Crystal
1986 年	吉波弘	<i>An Introduction to Language</i> , V. Fromkin and R. Rodman
1987 年	中澤和夫	<i>Linguistics</i> , Akmajian et al.
1988 年	秋元実治	『英文法』松波有著
1988 年	中澤和夫	<i>Linguistics</i> , Akmajian et al.
1988 年	吉波弘	<i>An Introduction to Language</i> , V. Fromkin and R. Rodman

1989 年	松波有	<i>The English Language</i> , D. Crystal
1992 年	吉波弘	<i>Contemporary Linguistics</i> , O' Grady et al.
1993 年	吉波弘	<i>Contemporary Linguistics</i> , O' Grady et al.
1994 年	吉波弘	<i>Contemporary Linguistics</i> , O' Grady et al.
1995 年	吉波弘	<i>Contemporary Linguistics</i> , O' Grady et al.
1996 年	吉波弘	<i>Contemporary Linguistics</i> , O' Grady et al.
1997 年	吉波弘	<i>Contemporary Linguistics</i> , O' Grady et al.
1998 年	吉波弘	<i>Contemporary Linguistics</i> , O' Grady et al.
1999 年	吉波弘	<i>Contemporary Linguistics</i> , O' Grady et al.
2000 年	D. L. Smith	<i>An Introduction to Language</i> , V. Fromkin and R. Rodman
2001 年	D. L. Smith	<i>An Introduction to Language</i> , V. Fromkin and R. Rodman
2002 年	外池滋生	<i>An Introduction to Language</i> , V. Fromkin and R. Rodman
2003 年	D. L. Smith	<i>Linguistics: An Introduction</i> , Radford et al.
2003 年	外池滋生	<i>Linguistics: An Introduction</i> , Radford et al.
2007 年	中澤和夫	<i>Linguistics</i> , J. Aitchison
2008 年	中澤和夫	<i>Linguistics</i> , J. Aitchison
2009 年	秋元実治	<i>Linguistics</i> , J. Aitchison
2009 年	中澤和夫	(1) <i>Linguistics</i> , J. Aitchison, (2) <i>A Guide to English Language Studies</i> , 中澤・武内 (編)
2010 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2010 年	外池滋生	『言語学への招待』中島・外池 (編)
2011 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2011 年	外池滋生	『言語学への招待』中島・外池 (編)
2012 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2012 年	外池滋生	『入門 ことばの世界』瀬田幸人 (編)
2013 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2013 年	外池滋生	『入門 ことばの世界』瀬田幸人 (編)

2014 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2014 年	外池滋生	『入門 ことばの世界』瀬田幸人 (編)
2015 年	高橋将一	『日英対照英語学の基礎』三原・高見 (編)
2016 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2016 年	高橋将一	『日英対照英語学の基礎』三原・高見 (編)
2017 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2018 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2018 年	E.S. McCready	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2019 年	中澤和夫	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)
2019 年	E.S. McCready	<i>Aoyama Student Handbook of English Linguistics and Philology</i> , 中澤・武内 (編)

* 本稿の執筆にあたり、関係資料を快くご提供して下さった、教育人間科学部教務課の中屋倫乃氏、青山学院資料センターの稲村伸子氏、英米文学科助手の間野優梨氏に心より感謝申し上げます。

注

1. 詳細に関しては、文部科学省のホームページを参照。
(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1387995.html)
2. 日本における英語学（文学から、英語史、英語学概論、音声学、英語教育に至るまで）の歴史については、田島（2001）を参照。
3. 日本最古の大学である東京大学の「英語学概論」の歴史については、田辺（2018）が回顧している。
4. 時代によっては、「英語学概論」と「英語学」は、ほぼ同義として捉えられていた。「英語学」は、「英語学概論」の講義で扱われる各領域の総称として用いられることもある。
5. 斎藤秀三郎が最初に出版した英文法の本は『スウキキントン氏 英語學新式直譚』（1884）であり、目次を見ると、Introduction は、grammar と composition に分かれており、grammar は更に6つに下位区分されている（Classes of Words, The Sentence and its Elements, Subdivision of the Parts of Speech, Modifications of the Parts of Speech, Syntax, Analysis and Synthesis）（豊田 1939: 250-253）。目次を見る限り、英文法の本であり、総説的な書と位置付けることはできないが、英文法を多面的に記述している点において、総説の先駆的研究書といえる。

残念ながら、この文法書を直に手にとることができず、1939年に岩波書店から出版された豊田實『日本英學史の研究』から引用した。

6. 市河三喜(1936: 224-251)は、ある特定の言語現象に焦点を当てた個別研究を「特殊研究」としており、様々な個別研究を紹介することで、研究方法や着眼点などを学生が学べるように構成している。
7. 宮部菊男は、「はしがき」で概論書の意義について次のように述べている。「何れの分野にせよ、何かの概論で一通りの基礎的な知識を得た上で、はじめて実際の英語の材料に接して、どのような方向に研究を進めようかと思うとき、どんな研究が過去にあったかと思うとき、もしかしたら多少は参考になるかもしれない。本書がそうした研究者のための序章として幾分かでも役に立てれば幸いである」。これは、市河三喜の指導の流れを継承するものである。つまり、概論書とは、自ら問題を提起して研究をするための手立てであるということである。
8. 宮部菊男の「特殊研究」は、市河三喜同様特定の言語現象に焦点を当てた個別研究を丁寧に紹介しているが、対象は古英語・中英語である。
9. 青山学院大学文学部英米文学科の歩みについては、手塚(1999)を参照。
10. 1950年(昭和25年)、第二部が開学するが、第二部については紙面の都合上、稿を改めて考察したい。
11. 青山学院大学文学部英米文学科第一回生である、岡三郎(2019: 24-25)は、当時を振り返り、「戦前、数少ない帝国大学の英文科主任が二人も青山に揃うことになり、全国の国公立の新制大学において他に類を見ない、よそ目には、まさに羨望すべき人事であった」と記している。
12. 1949年創立当初、英語学、イギリス文学、アメリカ文学に加えて、一般教養の英語科目「英作文法」や「英語教授法」・「英語演説論」・「英国史」・「米国史」・「欧州文学」・「古典文学」・「日本文学英訳」・「日本文学」など広範に渡り貴重な科目が開講されていた。
13. 1966年を最後に勇康雄は「英語学」の担当から離れる。
14. 翌年の1970年「英語史」は3年次に3コマ(毛利秀高、宮部菊男、寺沢芳雄)、4年時に3コマ(毛利秀高、桜井益男、桜庭一郎)の6コマが配置され、当時「英語史」という学間に勢いがあったことが、うかがえる。
15. 1983年と1987年は2コマ「英語学概論」が開講され、83年は秋元実治と吉波弘が、87年は秋元実治と中澤和夫が担当をしていた。秋元実治は、伝統的で包括的な「英語学概論」を、吉波弘と中澤和夫は生成文法理論に主点を置いた「英語学概論」をそれぞれ提供しており、2コマの時であっても均衡のとれた質の高い授業が行われていた。

参考文献

青山学院大学文学部英米文学科（1999）『創設 50 周年を迎えて』

青山学院大学文学部英米文学科.

市河三喜（1936）『英語學：研究と文献』三省堂.

市河三喜（1954 [1912]）『英文法研究』研究社.

大塚高信（1949）『英語學論考』研究社出版.

岡三郎（2019）「新制青山学院大学の発足当時の回慮と未来への期待」『青山学法』
第 268 号、24-25.

田島松二（2001）『わが国の英語学 100 年—回顧と展望—』南雲堂.

田辺春美（2018）「『英語学概論』の 100 年—何を教え、何を学んだか—」『成蹊英
語英文学研究』第 22 号、109-126.

手塚喬介（1999）「英米文学科 50 年の歩み」『創設 50 周年を迎えて』青山学院大
学英米文学科、9-18.

豊田實（1939）『日本英學史の研究』岩波書店.

豊田實（1973）『私の歩いてきた道』松柏社.

宮部菊男（1961）『英語学 テーマと研究—V—』研究社.

安井稔（1987）『英語学概論』（現代の英語学シリーズ第 1 卷）開拓社.